



300年の歴史を刻む

雷神社 湯立祭

4月7日(日) 太々神楽奉納 午前10時から
湯立神事 午後3時から

問い合わせ 雷神社氏子 中西 ☎ 090-2726-8692

震災を乗り越え市指定文化財として43年

雷神社(樋口)は、寛治元年(1087年)の創建と伝えられています。現在の社殿(本殿・幣殿・拝殿)は、江戸時代後期に再建されたものです。

本殿は、安永5年(1776年)に再建され、建物各所に見事な彫刻が施されています。幣殿は、棟札の記録によれば、もともと元禄2年(1689年)に拝殿として建立されたものを、安永8年(1779年)に新拝殿を建立する際に幣殿として改築されました。拝殿は、棟札によると、安永8年(1779年)に建立されました。

平成23年の東日本大震災により甚大な被害を受け、平成28から29年度の2年がかりで大規模な保存修理を行い復旧しました。この修理で、本殿から安永4年(1775年)と墨書きされた部材が見つかり、安永5年(1776年)に再建がなされたことが立証されました。



拝殿 総樑入母屋造、格天井、頭貫に獅子の木鼻を設けています。



本殿 龍、猿、象などの見事な彫刻が施されています。



大釜をお祓いする神官。この後、行者が米と塩を釜で煮て、笹束を浸して湯しずくをかぶり、お告げを賜る。

その年の吉凶と雷を 占い伺う神事

雷神社の湯立祭ゆたてさいは、江戸時代の元禄4年（1691年）に神社の本殿を改築したときから始められ、その年の吉凶と天候（雷）を湯立てにより占う神事です。

祭りの当日は、各地区の年番世話人が早朝から集まり、準備を始めます。神楽殿の前

に忌竹いみけを四方に立て、しめ縄を張りめぐらし結界を設けます。その中央に湯を沸かす大

釜を据え、北側に祭壇を設置します。祭壇には、御神酒や野菜、果物などのお供え物と、神事で使用する大皿いっぱいのお米と塩、笹束が供えられます。

神事は、神官の先導さきようしやで行者が結界の中に入り、神官の祝詞で始まりまます。神官は、結

界の四隅をお祓いし、続いて大釜、行者のお祓いを行います。

次に、神官から、行者にお米と塩が渡され、大釜の中に入れて、よくかき混ぜます。行者は、笹束を両手に持ち、煮えたぎった大釜に浸すと、まず結界の四隅で勢いよく頭

上に振り上げ、湯しずくを飛び散らせます。この時、湯しずくを浴びると、ご利益があるといわれています。次に神官に連れられ拝殿の前まで3回詣でて、同様に湯しずくを飛ばします。

最後に、行者は、大釜の前で全身に湯しずくを浴びると、神がかりとなり、お告げたくせん（託宣）が始まります。お告げでは、月ごとの雷や雨、台風などの状況が行者の口から述べられ、お告げが終わると行者は意識を失い、全身が硬直し倒れこみます。氏子たちは、行者を抱えて拝殿に運び入れ介抱し、やがて行者が意識を取り戻すと終了となります。お告げは、その日のうちに氏子たちに伝えられます。

内外大神宮と縁深い 太々神楽の奉納

湯立祭では、湯立神事の前に神楽殿で太々神楽が奉納されます。この太々神楽は、内外大神宮（小栗）の神楽師によって行われています。雷神社と内外大神宮との関係は深く、明治時代まで内外大神宮の神主が雷神社の神主を兼ねていたこともあり、現在に至るまで雷神社では内外大神宮の



太々神楽が奉納されてきました。

市では、この太々神楽の保存継承と後継者育成を図るため、映像記録保存事業を実施し、PR版、後継者育成版、ダイジェスト版の3種類のDVDを制作しました。このDVDは、市立図書館でご覧になれます。

